

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 35

『デカメロン』とペスト

堤 康徳

満開の桜も新緑も愛でる間もなく春が過ぎ梅雨に入った。新型コロナウイルス収束の兆しは見えたものの、いまだ蟄居の日々が続く。この特別な時期を何かの糧にしたいと思い、オンライン授業の準備のあいまに、ふだんなかなか腰を落ち着けて読む機会のない本を手取るが、どうもいまいち集中できない。私は四苦八苦しながら、プルーストの『失われた時を求めて』を少しずつ読み進めているところだ(もちろん日本語で)。カルヴィーノが *romanzo-enciclopedia* 「百科全書的小説」(Italo Calvino, *Lezioni americane*, Milano, Garzanti, 1988, p. 108) と評したこの巨大な書物に挑戦するのは、何度目だろう。最初はたぶん大学院生の頃。とにかく何度読み始めても、マドレーヌが出てくるあたりで頓挫してしまう。しかし今回は(読み始めたのは一年以上前だが)、昨年完結した吉川一義訳岩波文庫全 14 巻中、ついに第 11 巻(「囚われの女 II」)までたどりついた。ここまで来たら、意地でも読み通す所存である。

同性愛が主要なテーマとなる「ソドムとゴモラ」あたりからかなり面白くなってきた。多彩な登場人物のなかでも、同性愛者のシャルリュス男爵がとりわけ異彩を放つ。プルーストは、19 世紀から 20 世紀にかけてのフランスの社会と政治、風俗、科学、演劇、文学、音楽、美術などの人間の営みのすべて(旋律のたゆたいや、画家の微妙な筆遣いにいたるまで)、そして複雑に屈折する人間の心理を逐一言語化することを目指す。カルヴィーノが百科全書的と評するゆえんである。内容は、

ドレフュス事件をめぐるさまざまな言説から、哲学的な芸術論、俗物根性あらわな貴族どうしの社交界におけるあてこすり、かけひきにいたるまで幅広い。これらをプルーストは、ときに突飛な比喩をまじえた息の長い文章によって、またときに歌謡の一節やラシーヌの台詞からの引用、地口や言葉遊びも駆使しながら記述しようと試みる。したがって、訳文がきわめて明快であっても、けっしてすらすらと読める代物ではない。しかし、訳者による周到な註と、作品で言及される絵画や建築にかんする図版が読解の大きな助け(と気晴らし)になる。

ときに思わぬ発見もある。第 10 巻「囚われの女 I」に、パリの街角で行商するさまざまな商人たちの売り声の描写がある。たとえば、小さな車を押す「八百屋のおかみ」のかけ声はこんなぐあいである(吉川一義訳、岩波文庫、2019 年、p. 255)。

さあ、やわいよ、さあ、あおあおだよ
アルティショ、やわらかくて、みごとな
アルティ……シヨ。

アルティショとはアーティチョークのことだ。アーティチョークが、1900 年前後のパリにおいて、一般家庭の食卓にのぼる人気の食材だったことを知り、私は思わず膝を打ったのだ。

イタリアのなかでも、新型コロナウイルスの最も深刻な被害を受けた州は、ロンバルディーアで

ある。州都ミラノの高校の校長によって書かれた生徒宛ての手紙が、イタリアのみならず、日本でも話題になっている。それは、アレッサンドロ・ヴォルタ科学高校のドメニコ・スクイツラーチェ校長が、2月25日、同校のホームページに発表した手紙である。(https://www.liceovolta.it/nuovo/la-scuola/dirigente-scolastico/1506-lettera-agli-studenti-25-febbraio-2020)。5月7日の『朝日新聞』夕刊によれば、この手紙が日本語に翻訳されて世界文化社から刊行されたという。

校長の公開状は、マンゾーニの歴史小説『いいなづけ』第31章冒頭の一節の引用から始まる。『いいなづけ』全38章のうち第31章と32章において作者は、物語をいったん離れ、1630年のミラノにおけるペストの発生と蔓延の記述に章全体を割いた。スクイツラーチェ校長は、この驚くべき現代性をそなえた明晰なテキストを、このような混乱の日々にこそ読むように生徒に勧めているのである。外国人を敵視したり、0号感染者さがしに血眼になったり、そこにはすべてがすでに書かれているから、と。

校長は、疫病の蔓延がもたらす文明の危機について私たちに多くを教えてくれる作家として、マンゾーニとともにボッカッチョの名を挙げることも忘れてはいない。

ボッカッチョの名を不朽にした『デカメロン』は、『神曲』と並ぶイタリア文学最大の古典であり、ヨーロッパ最初の小説とも称される。そこで、『いいなづけ』は別の機会に譲って(プルーストもしばし中断して)、まずは古典に立ち返り、『デカメロン』のペスト禍の描写を読んでみることにしよう(オンライン授業の教材にしようという魂胆もあり)。

1348年、ペストに襲われたフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ教会で、七人の貴婦人と三人の若者が出会った。彼らは郊外の別荘に難を逃れ、一日ひとり一話ずつ、十日にわたって物語を語り合う(計百話)。ボッカッチョは、第一日の「前置き」において、枠物語の発端ともいべきペストの到来とその被害について以下のように書き起こす。

神の息子の受肉から千三百四十八年が過ぎたとき、イタリアのどの美しい都市よりもひととき

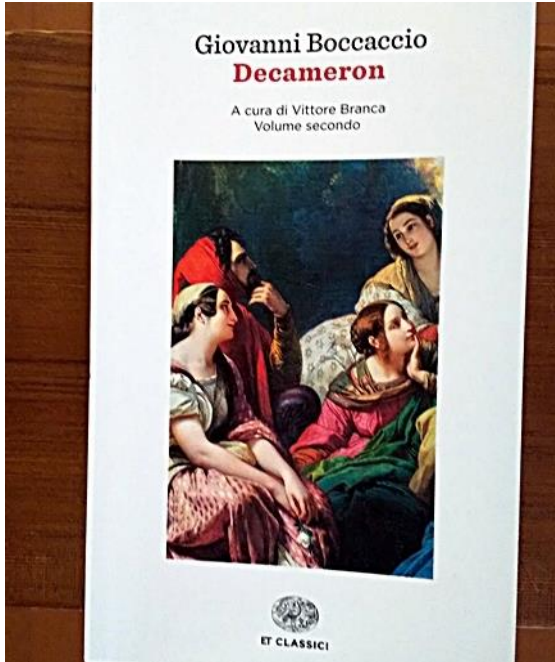
わ優れたフィオレンツァに死の疫病がやって来た。天体の運行によるものか、それとも、私たちの悪行にたいする神の正当な怒りが人間に裁きを下したからなのか、数年前に東方の各地で始まった疫病は、無数の人々の命を奪い、一か所にとどまることなく西に向かい、恐ろしいほどに拡大してしまった(Giovanni Boccaccio, *Decameron*, a cura di Vittore Branca, vol. I, Torino, Einaudi, 2014, pp. 14-15)。

ボッカッチョによれば、ペストによる死者は、フィレンツェ城内だけで十万人にのぼると考えられる(この数の正当性については研究者のあいだで評価が分かれる)。その惨状は、しかるべき葬儀と埋葬の欠如に最もよく表われていると思われる。多数の死者が、誰からも看取られることなくこの世を去った。犠牲者たちは数が多すぎて、その遺体はまるで動物の死体のように扱われたのだった。金で雇われた死体運搬人たち(becchini)は、急ぎ足で、個人が生前に選んでいた教会ではなく、いちばん近くの教会に遺体を運び入れた。わずかの灯りをともした数人の聖職者が彼らに従った。聖職者たちは、これら死体運搬人の助けを借りて、あまりにも長い厳粛な儀式は省き、空いている穴が見つかりしだい、遺体を投げ入れたのである(p. 24)。

大量の遺骸が、あらゆる教会に日々刻々と運ばれてきたため、埋葬のための神聖な土地が足りなくなった。それでも多くの人々が、昔ながらの慣習に従ってそれぞれの遺体にひとつの墓を望んだ結果、どこも満杯だったがために、教会の墓地に特大の溝がいくつも掘られ、新たに運ばれた遺体が何百と投げ入れられた。それがまるで船倉の積み荷のように幾層にも重ね上げられたため、わずかばかりの土をかけただけで、溝はすぐに天辺まで一杯になった(p. 26)。

ペストへの恐怖心が市民や隣人どうしの行き来を疎遠にし、家族の紐帯さえ断ち切ったことは、次の一節からうかがえる。

かくして、男であれ女であれ、その胸に入った苦痛にさいなまれ、兄は弟を捨て、叔父は甥を、姉は弟を捨てた。そしてしばしば妻は夫を捨てた。さらに深刻なのは、にわかに信じられないことではあるが、父親と母親が我が子にたいし、まるで親子ではないかのようにふるまって、見舞いや看病を避けたことである(pp. 21-22)。



ボッカッチョ研究の泰斗、ヴィットーレ・ブランカによれば、『デカメロン』におけるペストにかんする記述は、パウルス・ディアコヌスの『ランゴバルドの歴史』(Paulus Diaconus, *Historia Langobardorum*) を土台としているという(P. 14, nota 5)。パウルス・ディアコヌスは、8世紀の詩人、歴史家であり、モンテ・カッシーノのベネディクト会修道院とゆかりのあった聖職者(ディアコヌスは助祭の意)である。スカンディナヴィアに起源をもつとされるゲルマン系の民族ランゴバルドは、568年からイタリアの地でおよそ二百年続く王国を築いた。マンゾーニは『いいなづけ』を執筆する前に、ランゴバルド王国の滅亡を描く悲劇『アデルキ』を1822年に発表しているが、その主な典拠となったのがパウルスの『ランゴバルドの歴史』である。

ペストにかんするパウルスの記述は、ボッカッチョに比べればかなり短い。それは、6世紀のユ

スティニアヌス帝時代にイタリアとくにリグーリア地方で流行した大きな疫病(maxima pestilentia)にかんするものである。鼠径部がクルミ状に腫れる症状から、それがペストであることはまずまちがいない。そのなかに以下のような描写がある(第Ⅱ巻/4)。

子らは親の亡骸を埋葬しないまま見捨ててしまい、親は我が子への情を忘れ、身体を熱で灼かれる子らを置き去りにしたものだ。よしんば長年の義理人情から、隣人を埋葬しようという気持ちに駆られたとしても、今度は自分が死んで埋葬されずに置かれてしまう。故人の意向に従えば自分が滅び、弔いの礼を尽くさんとすれば自分が死んだときは弔われることがない。そのとき、この世は古代の静謐に引き戻されたかのように見えたかも知れない(パウルス・ディアコヌス『ランゴバルドの歴史』日向太郎訳、知泉書館、2016年、p. 46)。

この一節をボッカッチョが参考にして、自らのペスト禍の描写に活かしたことは明らかに思われる。

「この世は古代の静謐に引き戻されたかのように見えた(Videres seculum in antiquum redactum silentium)」(Paolo Diacono, *Storia dei Longobardi*, introduzione di Bruno Luiselli, traduzione e note di Antonio Zanella, Milano, Rizzoli, 1991, p. 236)とパウルスが伝える当時の情景は、新たなパンデミックに襲われた現在の世界と二重写しとなる。この時期、二酸化炭素の排出量が減り、世界の大都市の多くが青空を取り戻したという。また、ふだんは観光客でごったがえすヴェネツィアからいっさいの人影が消え、いつもはよどんだ運河に、クラゲなどの生物が姿を現したというニュースも伝えられた。これを私たちは、新型コロナウイルスがもたらした正の側面と捉えられないだろうか。思いがけず手に入れた澄んだ空気と水を、感染終息後、私たちはみすみす手放すべきだろうか。

(上智大学准教授)

『スピードと未来派』

谷口 和久

二十世紀は、スピードと競争の時代であった。

産業革命により生まれた動力機関は、機関車や船舶、自動車、飛行機など、陸・海・空のあらゆる移動手段に取り付けられた。それにより生活の利便性が向上しただけではなく、スピードと競争そのものが人々を魅了した。

『星の王子さま』の作者であるサン＝テグジュペリは、郵便飛行機のパイロットであったが、他の郵便会社とのシェア争いが激しくなるなか、次のような言葉を残している。

ぼくらはすべて、いまだに新しい玩具がおもしろくってたまらない野蛮人の子供たちなのだ。(中略)。あの一機はより高く上昇し、あの一機はより速く飛ぶ。なぜそれを飛ばすかということ、ぼくらは忘れてる。競争のほう、さしあたり、競争の目的より重要視されている。

(堀口大学訳『人間の土地』より)

船舶では、ヨーロッパとアメリカを結ぶ大西洋航路での速度競争が激しくなり、最速の船のためにブルーリボン賞とよばれる賞がもうけられるほどであった。タイタニック号の沈没も、夜間かなりの速度で北大西洋の氷山域を航行していたことが一因といわれている。

陸地を走る機関車や自動車も速度競争がヒートアップし、二十世紀に入るところには自動車の速度記録は時速 100km を超えるようになっていた。

そのような時代に、スピードを至上とする芸術家集団が現れた。詩人フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティを頭目とする「未来派」である。芸術家集団というより、むしろ思想集団とよぶほうが適切かもしれない。作品そのものより、宣言(マニフェスト)が先行したのだから。

マリネッティは 1909 年にフランスの新聞フィガロの一面に「未来派宣言」なるものを発表した。これは過去を否定し、機械文明や戦争を賛美するものであり、当然のごとく賛否両論を巻き起こした。



【未来派の創設者 フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ】

出典元：https://it.wikipedia.org/wiki/Filippo_Tommaso_Marinetti

イタリア人のマリネッティにとって、過去とはすなわち母国イタリアであり、過去の遺物に執着し旧態依然たる国のありように容赦ない言葉を投げつけている。

この宣言によって今日、「未来派」を創立するのであるが、それは、教授、考古学者、観光ガイド、骨董屋によるうす汚い腐敗からこの国を解放したいがためである。

すでにあまりにも長きにわたって、イタリアは古物商の市場となってきた。われわれは、無数の墓場によってイタリアじゅうをおおいつくす無数の美術館から、イタリアを解放したいのだ。

(エンリコ・クリスプオルティ、井関正昭 構成・監修『未来派 1909-1944』より)

かたや近代文明のもたらしたスピードに対しては、手ばなしの称賛を送っている。

世界の偉大さは、ある新しい美によって豊かになったとわれわれは宣言しよう。それは速度の美である。爆風のような息を吐く蛇に似た太いパイプで飾られたボンネットのあるレーシングカー……散弾のうえを走っているように、うなりをあげる自動車は、《サモトラケのニケ》よりも美しい。

(前掲書より)

マリネッティいわく、「スピードとはあらゆる勇氣ある行動の総合であり、攻撃的であり、戦闘的であり、(中略)新しいものと未知のものに対する願望であり、近代性であり、衛生法である」。

一見すると首肯してしまいそうな文章であるが、末尾の「衛生法」という言葉は、別のところでは「戦争は世界の唯一の衛生法」などと使われており、注意が必要だ。では、未来派が速度によって希求するところは何か。

- 速度によって縮小された地球。新しい世界感覚。
- 機械によって力を増した人間。新しい機械的感覚、エンジン効率、訓練された力と本能との融合。
- スポーツの情熱、技術、理想主義。「記録」という観念と、それに対する愛。

(前掲書より)

この文章の中で「エンジン効率」を「人間の運動効率」と置き換えれば、とくに後段の2つは、自転車乗りにとって大なり小なり共感できる内容ではないだろうか。

極東に暮らす私たちも、移動手段や情報伝達のスピード化によって、欧州の自転車競技というものの存在を知りようになった。そこでは、「訓練された力」をもつ「機械によって力を増した人間」たちが、「スポーツの情熱、技術」をもって、「記録」という観念と、それに対する愛」を求めている。私たちもマリネッティたちと同じように、速度のもたらす魅力(魔力)に取りつかれている。

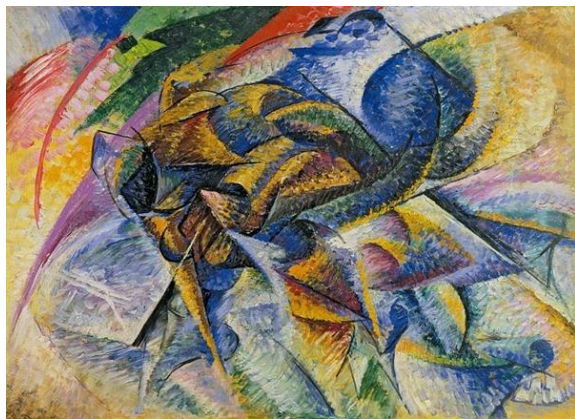
これまで述べてきたようなコンセプトにしたがってつくられた未来派の芸術作品は当然、前衛的なものであり、表面的にはキュビズムの係累のような一面もみられるが、むしろ機械の美や速度の美をあらわそうとした結果ともいえるだろう。

あらゆるものが動き、走り、素早く変化する。ひとつの姿はわれわれの前に決して一定してはおらず、絶えず現れては消える。網膜上でイメージが持続することにより、運動する物体は増殖し、変形し、連続して生起し、振動のように、空間の中を通過する。したがって疾走する馬の脚は4本ではなく20本であり、それらの動きは三角形をなす。

(前掲書より)

走っている人の足を渦巻き状にしているのを、昭和のマンガでよく見かけたが、「目にも止まらぬ」ものを描くことの苦闘が伝わってくる。しかも、馬ならまだしも、当時、現れたばかりの自動車や機関車のスピードとなれば苦労もひとしおだろう。むしろ、その苦闘ぶりもふくめて伝えることに未来派の意図があったのかもしれない。

未来派の画家ウンベルト・ボッチョーニの描いた《サイクリストのダイナミズム》という作品では、背中を丸めてハンドルを握りしめる自転車選手が、かろうじて認識できるというレベルだ。乗り手も自転車も、その形態をほぼとどめず、流れる空気の中になかば同化してしまっている。



【《サイクリストのダイナミズム》ボッチョーニ画】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Dinamismo_di_un_ciclista

ポッチョーニが、乗り手も自転車もほぼ同化して描いたのはある意味、象徴的だ。この感覚は自転車特有のものだからだ。



【サン＝テグジュペリ】

出典元：<https://www.britannica.com/biography/Antoine-de-Saint-Exupery>

アルセーヌ・ルパンの生みの親モーリス・ルブランは、『これが翼だ！』というタイトルでサイクリングを描いた小説を著しているが、その中で主人公がサイクリング体験について、喜びと驚きをもって以下のように語っている。

これは、人と馬みたいに二つのものじゃないんだ。ひとりの人とひとつの機械じゃないんだよ。前より速いひとりの人間が出来たんだ。

(スティーヴン・カーン著、浅野敏夫訳『時間の文化史』より)

徒歩かせいぜい馬車でいどの速さしか知らなかった十九世紀末から二十世紀初頭の人々にとって、機械のもたらすスピードは異次元のものであり、解放感や自由感など、新たな感覚をもたらした。

速度だけを見れば当然、自動車や機関車のほうが速いわけであるが、いずれもそのスピードは受動的にもたらされるものだ。一方で、自転車特有の「自分の力で進んでいる感覚」、すなわち能動的にスピードを生み出しているという感覚は、独自のものであり、自由度や解放感は比べものにならないといえるであろう。

『これが翼だ！』の主人公は二組の夫婦だが、彼らはサイクリングを続けることでいつしか常識や社会規範からも解放され、服を身に着けることもなくなって、最終的に旅行の後には夫婦の組み合わせも変わってしまったという。

ルブランの描く自転車乗りも、未来派のさまざまな言動も、いずれも極端なものではあるが、当時最新鋭の機械化文明がもたらした、新たな感覚による極端な反応ということでは合点がいく。

サン＝テグジュペリも、先にあげた著書の中で、人類二十万年の歴史において機械化による新たな感覚を知ったのはたかが百年ていどの話であり、人類が正しい評価ができるようになるには、まだまだ時間が必要であろうと語っている。

こんにち、コンピューターやインターネットにより、私たちをとりまく環境変化はさらに加速されているが、正しい評価が変化のスピードに追いついているのだろうか。

【参考文献】

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009
Comune di Novi Ligure, *Sport e '900*, Massimo & SONIA CIRULLI, 2004

『未来派 1909-1944』(エンリコ・クリスポルティ、井関正昭構成・監修、東京新聞、1992)

『未来派』(キャロライン・ティズダル、アンジェロ・ボツォーラ共著、松田嘉子訳、PARCO 出版局、1992)

『人間の土地』(サン＝テグジュペリ著、堀口大学訳、新潮社、1955)

『時間の文化史 上巻』(スティーヴン・カーン著、浅野敏夫訳、法政大学出版局、1993)

『イタリアのアヴァン・ギャルド』(田之倉稔著、白水社、1981)

『アヴァンギャルド芸術論』(ジョルジョ・デ・マルキス著、若桑みどり訳、現代企画室、1992)

『空から女が降ってくる』(富山太佳夫著、岩波書店、1993)

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>